

焼酎かすでバイオガス発電

出力600kW、
消化液利用も
大分県宇佐市にオープン

未来電力

エネルギー総合企業の未来電力（大分県宇佐市、末宗秀雄社長、☎0978・37・1317）が、焼酎かすを活用できる「宇佐バイオガス発電所」（同市）の稼働を開始させ

た。7月27日には落成式を開催。発電（出力600キロワット）だけでなく、消化液利用も行う循環型施設として注目を集めている。

総事業費は約10億円。パートナー企業として日本プライスマネジメント（北九州市）がプラントの設計・製造

に協力した。同発電所はミカン園跡地に建設され、その敷地面積は約8000平方メートル。処理能力は日量30トで、主に県内の酒造会社から焼酎かすを受け入れる体制とした。すでに現在、焼酎かすをはじめ、食品残さなど日量25トほどが入ってきて

いるという。

処理工程は、これらをメタン発酵させてガスを取り出し、発電する流れ。総発電量は年間303万キロワット時を見込んでおり、場内で使用する分を除き全て九州電力に売電する。FIT制度を活用し、年間1億2000万円の

売上を目指す。

また、発酵後に出る副産物の消化液については、液肥として、同社の関連会社「未来農林」（宇佐市）が運営するカボス農園（25畝）で活用していく他、地区内の農家には無償提供する。地区外の農家に対しては販売する計画だ。

従来、酒造会社から大量に排出される焼酎かすは産業廃棄物として処分され、その処理コストが高いことが課題となっていた。同社はこの点に注目し、同事業の着手を決めた。

末宗秀平専務は、「処分施設としてではなく、あくまでも発電所としてしっかり利益を生む継続性のある事業にしたいと考えた。独自の前処理工程を入れることで、効率のよいメタン発酵に成功。利益を生む仕組みを構築

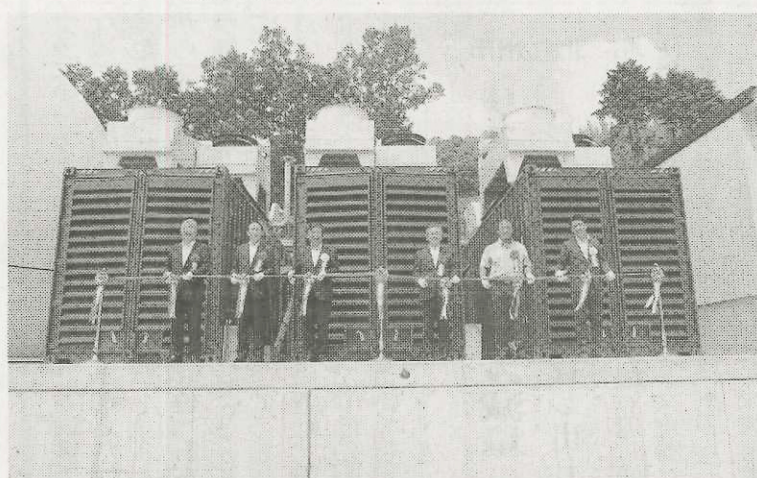
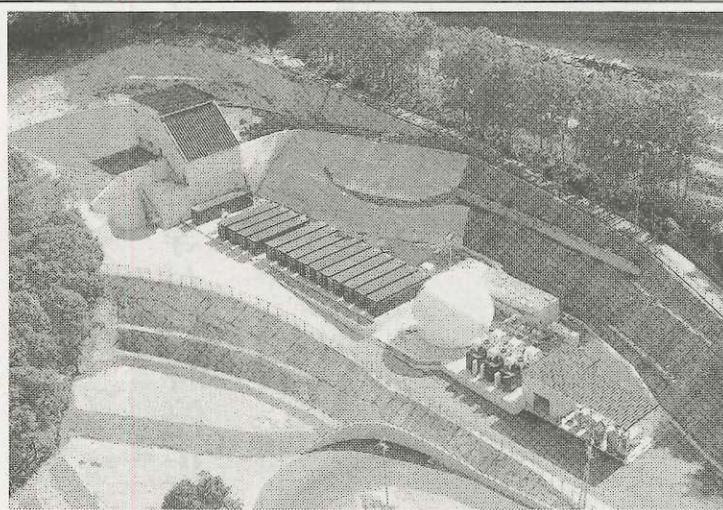
処理に悩む地域に、さらに全国には各地域の特性に合わせたものにして同システムの導入を広げていきたい」と意気込む。

同社は、①国内のエネルギー自給率の向上、②エネルギーの地産地消型社会の実現、③地球環境の保全と持続可能なコミュニティの構築——を目標に掲げ、自然エネルギーによる

近畿エリア特集の紙面から

挑戦企業の注目事例	10面
処理困難物最前線	11面
木質バイオマス発電	12面
建廃最前線 ～現状と課題～	13面
地域発！活躍する 元氣な企業	16～17面

発電事業を展開。大分県宇佐市内において、所の施工実績を持つ。



落成式でのテープカットのようす